

GILLETTE

NO RETURN, PLEASE.



FERDINANDO FREGA

A MEMOIR OF CORPORATE MISUNDERSTANDING AND LITERARY REFLECTION

GILLETTE、出戻りはご遠慮ください

私は2003年12月1日に、母なるGilletteを去った。

大企業の世界から歩み去り、18年間占めてきた役割を後にした。

劇的な決断ではなかった。

むしろ、古いスーツを洋服だんすに戻して、もう着ないと決めるような感じだった。

擦り切れていたからではない。

ただ、私になりたいと思う人間に、もう似ていなかったからだ。

だから私は、別のスーツを探しに出た。

誰の許可も必要としない未来が入るだけの、ゆとりのある一着を。

物語はそこで終わるはずだった。

だが、終わるつもりなどさらさらない物語というものがある。

ただ待っている。

そしてある日、請求書を送りつけてくる。

ほぼ23年後、人々が道で私を呼び止めて言う。

「Gilletteのお仕事に戻られたそうで、本当にうれしいですよ」

問題は、戻っていないということだ。

そしてそれを説明するのは、意外なほど難しい。

それから、いろいろな説が出てくる。

「いまはGILLETTENARRATIVEを率いておられるんですよね。あの有名ブランドの新しい出版部門を」

この時点で、現実には正式に部屋を出ていく。

たいてい、次の質問がつづく。

「いったいどうやってそんなことをやってのけたんです。61歳で、大学も出ていなくて、イタリア語は4点という見事な成績で」

どう答えていいのか、わかることはめったにない。

それから、かつての同僚たちが電話をかけてくるようになる。

なかには、あのブランドのなかに自分たちの入れる空きもあるのではないかと、本気で知りたがっている様子の者もいる。

そのとき私は、誰も説明してくれなかったことを発見した。

文学には、誰も事前に教えてくれない副作用がある。

もっと早く知っていたら、もっと静かな職業を選んでいたかもしれない。

釣り、とか。

営業でないことだけは確かだ。

いまでは、故郷の町長までこの話を耳にしている。

誰かを雇ってくれと頼みに、うちの玄関先に現れないことを祈るばかりだ。

現実的な問題を抱えることになる。

私はオフィスを持っていない。

本社もない。

人事部もない。

あるのは机ひとつ。

キーボードひとつ。

そして一生分の物語。

残りは持ち歩いている。

ほかのどこに置いていけばいいのか、正直わからないからだ。

Gillettenarrative.comへようこそ。

あなたのメッセージは、人間が読みます。
たいていは、本を書いたのと同じ人間です。

P&G、Gillette、BIC、Wilkinson、Schick、L'Oréalのお客様へのお知らせ

メッセージとご関心をお寄せいただき、ありがとうございます。

当方では、製品、注文、出荷、商取引上の問題、苦情、価格表、特別価格を取り扱っておりませんので、ご了承ください。「slow moving」のカテゴリーを含め、いかなる種類の注文も処理いたしません。

何のお話かは理解しておりますが、それは当方の仕事ではありません。

Pampersのご注文の件でご連絡くださったニューヨークの卸売のお客様には、特にお礼を申し上げます。シンシナティの仕入先に直接ご連絡ください。当方にできるのは、せめてものお手伝いとして、ご連絡を転送することだけです。

私たちの編集空間には、無料で、喜んでお迎えします。文学が現実と出会う場所をただ分かち合うために — 誰にも決して消すことのできない大きな世界のなかでの、58年の経験を。

フェルディナンド・フレーガ
owner@gillettenarrative.com

フェルディナンド